あひるの会
みどりの風
MIDORI NO KAZE
No.70　発行日　令和5年 9月25日
H.P　http://akaneen.com/

「働くことを通して」拡がる地域共生の輪

あかね園統括施設長　松尾　公平

今から25年程前のことです。

当時私が担当していた利用者の方をあかね園近隣の大手アパレルメーカーの大型物流倉庫で実習をさせて頂くことになりました。

その頃は大きな企業でさえ障がい者が現場で働いている姿は珍しい時代です。あかね園からの実習生も手厚く丁寧な対応での実習となり、本人の持つ力の半分も発揮できたかな?! と思えた仕事振りも大絶賛され“お客様”としての実習を終えました。

当時、あかね園の工場では利用者も職員も山の様な作業に共働する姿が当たり前でした。彼らの仕事に対する真面目な姿勢や個性と業務がマッチした際の高い生産力を目の当たりにし、私自身も必死に張り合う日々でしたので、物流倉庫を歩く中では自然と多くの業務と利用者の姿を重ね「○○さんならこの仕事ができる」「彼らだって充分に働けるのに」と強く感じ、いずれこのような物流倉庫の至る所で利用者達が力を発揮し、彼らの力を多くの人に認めてもらいたい！と、この仕事に就いて間もない私の大きな目標となりました。

そこから時代は大きく動き、制度も「福祉から一般就労へ　“H18障害者自立支援法”」、「(障がいのある人もない人も) 共生の社会へ　“H25障害者総合支援法”」が掲げられ、法定雇用率も令和８年度までに段階的に2.7％に、他にも特例子会社の急増や企業在籍型ジョブコーチの導入等もあり、障がい者が企業の中で働くことの土台が急ピッチで整えられてきた感があります。

あかねの利用者達の働く活動の拠点も「施設外就労」というかたちで「園（敷地内)」から「企業（地域)」中心へとスタイルを大きく変え、日々利用者の半数があかね園を「空（から)」にし、近隣企業に職員と共に出掛けていきます。

そして現在、市内のある大型の物流センターではあかね園から日々20名を超える利用者と職員が企業内の複数のフロアやエリアに分かれ、企業の方に混ざって様々な業務に従事する姿があります。

利用者にとっても就職する前に企業内での実践的な訓練ができる有難さもあり、また企業側からも「(利用者の働く姿勢は) 社員にとっても良い刺激をもらっている」「企業にとっても必要な存在」という評価を頂けるようにもなりました。

25年前には「目標」だったことが少しずつ実現し、これからはこれらの取り組みが、「当たり前」となる社会に向け、新たなる歩みを進めていきたいと思っています。

あかね園では働くことの活動を通して利用者達の「成長」や「経済的な自立（高い工賃、就職)」等を理念に掲げていますが、活動を通して見え難い大きな成果として「(障がい者の本当の姿を) 知ってもらえること」があります。

実は数年前に近隣市でグループホームを開設しようとしたところ、周辺地域から建設反対の署名運動を展開され、断念したことがありました。

しかし「本当に反対」しているのは隣接した方だけで実際は「(わからないから) 反対」や「隣が反対なので」と明確な理由の無い方が大半です。

一方、あかね園の卒園生と同じ職場で働いている近隣の方や園のバザーを毎年楽しみにして頂いていた方には快く受け入れて頂いたようです。

障がいを理由に自分の住む場所ですら自由に選択できない地域の実情に悲しさや、くやしい思いもしましたが、障がいのある人も無い人も共に暮らす「地域共生社会」に向けては、「障がい（者）のことを正しく知ってもらう」ことが重要であることを改めて痛感しました。そして彼らが一生懸命に働いている姿を見てもらう事、「働くことを通して知ってもらう事」が共生の一番の近道と考え、企業に赴いての、職場の中での「共働」、社員食堂や更衣室の「共有」等こうした実体験（活動）を通して周囲の人達が感じる「知らない事」からの不安の軽減と互いを認める機会をさらに拡げていきたいと考えます。

次頁の2面・3面では、現在とこれまでのあかね園が地域に展開している「働く事を通しての地域共生」の様々な取り組み（活動）をご紹介したいと思います。

「働くことを通して」拡がる地域共生の輪　～園生達が拡げてきた施設外での働く取り組みの30年～

1990

新たな「働き方」を求めて

園の「働く」取り組みも設立から10年が経過し、新たな展開が求められていました。
そんな時、近隣のリサイクル工場で職員と利用者がグループで働かせて頂く場（外作業班）の第1号が誕生します。当時、就労訓練を行うあかね園のような施設は「授産施設」と言われており、施設から出て働くこのような取り組みは「企業内授産」という名称でした。

●平成9年

市川環境班

●平成10年

千葉興産班

あかね園初の「外作業班」はリサイクルという業種もあり、当時では暑さ、寒さや臭い等、決して恵まれた環境ではありませんでしたが、利用者本人達は企業の中で働くことのできる喜びとプライドをもち、嫌がる人はいませんでした。また、「少人数での作業」や「コンベアー」といった園とは異なった環境により、高い集中力や体力、精神面が養われ、多くの方が企業に就職し、また年齢を重ねても心身の丈夫さは今でも健在です。

2000

舞台は施設から地域へ

「施設から一般就労へ」と福祉の制度によって障がい者の働き方や選択肢も大きく変化した時代です。あかね園に求められる地域ニーズの高まりもあって、定員も段階的に増員（40名→60名→72名）し、年間の就職者数も二桁を超えるようになりました。
一方、作業の収入や利用者の工賃が長年にわたり伸び悩み、地域の企業に積極的に営業活等を展開し、様々な場所に働く場や働く機会を拡大していった時代でした。

●平成17年

カンダ班

ヤオハル班

企業からの要請に応えるべく、利用者と職員が大人数で企業に赴く初の取り組み。ピーラーを使っての日々1トン以上の人参の皮むきをしてました。

●平成18年

イケア班

●平成19年

アート班

園の工場で受託していた働きぶりが認められ、会社の中にあかね園の作業場を設けて頂きました。のちに複数の業務を請け負い、企業内でグループに分かれて業務を担う初の作業班となりました。

●平成20年

サッポロ班

あかね園から車で5分程度の場所にある衣料品メーカーで値札付け等の業務を担いました。体力的負担も少なく、比較的障がいの重い方や女性も参加できる初の作業班でした。

家具の組み立てやピッキングといった難易度の高い作業に挑戦した作業班は、制服や社員食堂など、当時から利用者にとっては目標や憧れとなる班でした。

ビール工場内の植物園での初の本格的緑地管理業務でした。芝刈り機や刈り払い機等も導入し、あかね園での緑地管理業務が大きく発展していく契機となりました。

2010

企業は「貢献」から「戦力」へ

社会全体の労働力不足が深刻化する中、企業の障がい者に対する見方も変わってきました。
障がい者の勤務の安定性や作業の持続性等を戦力として評価頂く企業も増えつつあり、その「対価」（工賃）も大幅に見直しされてきました。

●平成26年

テンポス班

●平成29年

住商GL班

初の店舗内での業務
皿洗いや商品の陳列等を請負い、一般のお客さんが出入りする中での接客対応も求められた班でした。

あかね園から日々20名を超えるグループが大型物流センターに赴き、多岐の業務で活躍しています。取り組みを通して企業の方やパートさん等多くの方々への障がいの理解促進にも繋がっています。

2020

「あたりまえ」の地域へ

障がいのある方が働く場や機会を提供されることに留まらず、障がいのない方と同様に待遇や育成、定着といった働くことの「質」を高めていく「あたりまえ」の時代へと進んでいきます。

●令和2年

●令和4年

行政・公共機関からも

近年では市役所各課や関連施設等からの業務依頼も随分と増えてきました。通常業務時間外等に行っていた業務の依頼を頂き、市役所内の会議室等をお借りし業務を行います。業務中や終了後にはいつも市役所の方から労いの言葉を頂けることが、本人達の意欲や達成感に繋がっています。

ほかにも、こんな「働く活動」を通して、地域に貢献してきました（期間限定のスポット作業）

あかね園近隣の公園清掃業務は毎月数回実施しており、この活動は30年以上も継続しています。

リース会社さんからは店舗に設置する巨大クリスマスツリーの飾りつけや正月に飾った角松の解体作業等を毎年請け負いました。

20年程前のバレンタイン商戦の時期には製菓工場の人出不足を補う為に「あかねライン」を急造しチョコレートの袋詰めを請け負いました。ひと月に100万円程出稼ぎし、工賃UPにも大きく繋がりました。

近隣の老人ホームでのシーツ交換のお手伝いや地域の高齢の方が集まるサロンにお茶出し等のお手伝いにも行きました。それぞれが自分のできる範囲での役割や活躍の場があります。

ある冷凍工場の工場長さんから「工場の大半を占める中国の従業員が春節になると皆帰国してしまい困っている」との相談を受け、「春節」期間限定の出張作業を行い、大変感謝されました。

近年、地球温暖化や人手不足が相まって、企業や公共施設から緑地管理の依頼をたくさん頂いています。暑い時季にはこまめな休憩や水分補給をしながらの大変な業務ですが、終了後には見た目にも達成感が得やすい作業です。

年に数回依頼される使用済み電池の選別作業です。こういった環境に配慮した業務等も増えつつあり、障がいのある方達の活躍の場も今後ますます増えてくるかと思います。

後援会2022年度決算報告と2023年度事業計画

2022年度後援会の運営は、皆様のご支援ご協力によりその役割を果たすことができました。お礼申し上げますと共に、大変遅くなり恐縮ですが、ここにご報告致します。

2022年度も前年度に続き、例年どおりの事業ができず、皆様にはご心配をおかけしました。後援会事務局のあかね園内での活動は制限や自粛が続いていたため、年度内に2回の「みどりの風」発行に努めてきました。

2022年度法人へは、700万円を寄付致しました。あかね園の建て替え計画が進んでいることから、会費収入と前年度繰越金より支出致しました。

決算につきましては、4月11日山﨑順子、大城廣美両氏の監査を受け、適正と認められました。

なかなか先を見通せず、事業計画は予定の域を出ませんが、2023年度も引き続き皆様の温かいご支援ご協力をお願い申し上げます。

（単位：円）

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	3,289,556	事務費	469,180
会員会費	5,541,000	研修費	0
（個人319名、企業25件）		法人への寄付	7,000,000
寄付金	20,000		
預金金利	22	次年度繰越金	1,381,398
合　計	8,850,578	合　計	8,850,578

2023年度事業計画

4～5月	会員増強月間
9月	みどりの風70号発行
3月	みどりの風71号発行（予定）

園　日　誌

伊藤　樹

私が就労移行支援事業に所属し、約3年が経ちました。

私のモットーは利用者の方々には、「作業、生活を通して就職を目指す事」に加え、日々「生活を楽しむ事」も大切にして欲しいと思っています。

就労移行支援事業の職員としての1週間は、利用者から「今日は樹さんは（どこ）？」と聞かれるほど、本体施設や外作業班での作業支援、実習先の巡回や卒園生の職場訪問等、あちこちを駆け回っていますが、私自身「利用者と同じ目線に立って仕事も楽しむ事も全力で行なう」という考えの基で作業以外の場面でも利用者とできるだけ一緒に楽しむこととしています。これから社会に出て働く彼らには時に、社会人としての立場から厳しいかな？と思いながら関わる場面もありますが、それ以上に「伊藤は楽しい職員だ」とも思って頂けるよう努めています。

このメリハリについても就職後の生活には必要不可欠であると考えております。仕事と息抜きをしっかりと両立できるようこれからも支援を行なっていきたいと思います。

後援会へのご入会をお願いいたします。

一般会員（年間一口　3,000円）　法人会員（年間一口　10,000円）
郵便振替　00260-1-88365　口座名：あひるの会後援会
銀行振込　千葉興業銀行　津田沼支店 普－4771251
口座名：社会福祉法人あひるの会 後援会　代表　国松実枝子
入会申込み、問合せは事務局まで
047-452-2715　Fax 047-452-2693

編　集　後　記

園舎建て替えが決まりました。このようなタイミングに立ち会うことが出来、このうえない幸せを感じます。来年の完成を心待ちにし、利用者や卒園生にとっての”ふるさと”であるあかね園の更なる充実と発展を願い、後援会としては今後もしっかりと応援できるよう努めたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。（N）

編集人　あひるの会 後援会代表　国松実枝子
発行所　社会福祉法人あひるの会 後援会
〒275-0024 習志野市茜浜3丁目4番5号